

目ぐすり

いち

むかし、みかわ三河の

かりや刈谷という

ちい小さな

じょうかまち城下町に、

しちえもん七右衛門と

いう、ひと人のいい

じいさんが、おばあさんと

ふたり二人で、

つましく、

くらししていました。

ある 冬の^{ふゆ} よるの ことです。じいさんは、ちかくの 村ま^{むら}
で ようたしに いった かえりに、村の^{むら} いざかやで おさけ
を のんで、いい きげんで かえりました。

もう よるも ふけて、どこも しいんと していました。町へ^{まち}
入る^{はい} とちゆうには、ひるでも ぶきみな 竹やぶみちが^{たけ} あり
ました。そこには、もとから、たちのわるい きつねがいて、よ
く 人を^{ひと} ばかすので、よるになると、だれでも こわがって、
とおくを まわって とおりました。

しかし、七右衛門しちえもんじいさんは、おさけの元げん気で、そんなことにはおかまいなく、へいきでそのやぶみちへ入はいりました。すると、むこうのほうの木立こだちのあいだから、ちらちらと人家じんかのあかりらしいものが見みえました。こんなやぶの中なかに、うちなぞがあるわけもないのではてなどおもいながらちかよってみました。と、ふしぎなことに、そこに小ちいさなわら家があつて、中なかでは小ちいさくしやみせんをひいて、「おくられて、ひろいのをゆけばの、」

ゆらゆらと　さいたる、さいばらの　花はなよな。」

と、年としわかい　女おんなの　こえで、うたを　うたっています。

「ほう、いいこえだな。」と、じいさんは、のき下したに　立たって　き

いていますと、中なかでは、それと　気きが　ついたのか、しやみせん

も　うたも、ひよいと、やんだと　おもいますと、入口いりぐちの、がた

がたの　とが　あいて、十五じゅうご、六ろくの、かわいらしい　女おんなが　かお

を　出だしました。

「おじいさん、そこは　さむいでしょう。どうぞ　お入はいりなさい。

さむいから、あたっぺいらっしやい。」と なれなれしく ことば
を かけます。

「へえ、うたを ひと一つ ふた二つ きかしてもらうかな。上手じゃね、じょうず

あんたは。」と、じいさんは、よろこんで うちへ はい入りました。

見ると、みいろりの そばに、むすめの おふくろらしい、よんじゅう四十が

っこうの、ひんの おんないい ひと女の人が すわっています。目めを わ

ずらっていると み見えて、あか赤い 、もみの 、きれで、りよう目めを お

さえ おさえしています。

もみ…赤くそめ
たきぬのぬの

「これは、はじめまして。」と、おじいさんは、くわいあたまを
よこんと 下^さげて、あいさつを しました。

「さあ、どうぞ こちらへ。むさくるしいところで。おせんや、

おじいさんに 一^{ひと}つ うたって きかせて お上^あげなさい。」

ははおやが こう いますと、むすめは、はずかしそうに
やみせんをとって、

「おてらの ぼんさん、ちやわんもりを なさるの。

ちやわん、カラリン、チンカラリンと

くわいあたま：
かみのけをうし
ろでたばねてみ
じかくたらした
かみがた

ちやわんもりを なさるの。」

と、きれいな こえで うたいました。

「ははあ、おもしろい おもしろい。どうぞ もう一つ ひつ きかせ
て下さい。」と、さけに よった じいさんは、目を め つぶって き
き入って いは、どうぞ もう一つ ひつ、すみませんが、もう一つ ひつだけと
たくさん うたわせました。じいさんは、あんまり ながいをし
ては わるいと おもって、

「どうも ありがとうございました。あああ、気が き のびのびし

ました。では ごめん下さい。」と おじぎをしました。

「あら、おかえりで ございますか。なんの おかまいも できません。どうか また いらしつて下さい。わたしたちは たった 二人で さびしいんですから。」と、おふくろは もみで 目をおさえながら いいました。じいさんは 気がついて、

「そうそう、目が おわるいようだな。さぞ おこまりでしょう。」
と いいますと、

「これも、もう 年のせいでは ありませんか。わかいころは

どうも なかったものですが、この 二、三年にまえから、きゆう
に わるくなりましたして、苦しくて たまりません。いまに りよ
う目めとも つぶれてしまふんじゃないかと おもいます。」と、う
つむいて、なみだを ほろほろ こぼしました。

「そりやいけない。一つ 目めぐすりでも さしてみたら どうで
しょう。町まちの ひしだやという くすりやは、わたしの こんい
な うちです。わたしが そう いったと 行って、あの みせ
へ 行って、いい くすりを おもらいになったら どうです。」

と いますと、 ははおやも むすめも 下したを むいたまま だ
まっています。

「ははあ。そうか。びんぼうで お金かねが ないんだな。」

と じいさんは かんづきました。

「なあに、ひしだやなら、わたしからだと いえば、目めぐすりの
一ひとつや 二ふたつは、よろこんで、ただでも くれてよこします。え
んりよはないから、もらっていらっしやい。あすのあさ はなし
ておきますから、おねえちゃん、ひるまえに 行って もらって

きなさいよ。」

しちえもん

七右衛門は、かわいそうに おもって、ひしだやへは かね金を はらっておき、むすめが いったら、ただでくれるような かつこ
うにして、くすりを わたすようにしてやろうと おもいました。
ははおやは ほくほく よろこんで、

「ありがとうございます。それでは おことばに あまえまして、
むすめを さし出だしますから、どうぞ よろしく おねがいもう
します。それから、かつてで ふたりございますが 二人とも ひるの

うちは てましごとを いただきますので、やぶんのほうが つづ
うが いいのですが、それでも よろしゅうございませうか。」

「ええ、いつでも かまいませんよ。」

「あの。」と こんどは むすめが、おずおずしたように、

「あの、ひしだやさんには 犬いぬが おりますでしょう。」と きき
ます。

「ええ、います。クマおおっていう 大きな つよいやつが います。」
と、じいさんは なんの気きもなく こういいますと、むすめは

「おお、いやだ。」と、そでで かおを かくして、ちぢこまりました。ははおやは わらって、

「どういうわけですか、この子は 生まれつき 犬が それは
きれいでございまして。もう、どんな 小さな 犬ころを 見て
も ふるえ上がるんですの。で、まことに あつかましい おね
がいますが、この子が まいりますときだけは、ひしだやさんの
犬を、うらへ、しばっておいて いただけませんかでしょうか。」

「はっは、ようがす。そうさせましょう。」

ふたり
二人は なんども あたまを 下^さげて おれいを いいました。

じいさんは うちへ かえると、いまのことを すっかり お
ばあさんに はなしました。すると、おばあさんは あたまから
ばかにして、

「なにを いうんですよ、おじいさん。あんな やぶの 中^{なか}に だ
れが すんでるものですか。あんたは、ぼんやりしていて きつ
ねに だまされたんですよ。ばかばかしい。」

と 大^{おお}わらいをしました。

じいさんは、もう おさけの よいも

さめていました。そう いわれてみると、

だい一、^{いち}あんな ところに うちがあつ

て、あんな ^{おんな}女や むすめが いると

いうことからが へんです。それに、あ

の^こ小むすめが ^{いぬ}犬のことを こわがった

のも、さも きつねらしい。あす、また

こつそり いててみよう。そうすれば、ことは わかると、じい



さんは こうおもって ところに つきました。

二に

あくる日、^ひじいさんは、いつものように のらへ^で 出て はた
らきました。そして 夕^{ゆう}がたちかくなってから、れいの やぶの
中^{なか}へ そつと いったみました。すると、ゆうべの うちなぞは
どこにも 見^みあたりません。ふふん、やっぱり きつねに ひつ
かかったのかと、わかりました。

でも、くすりのことは、やくそくどおり とりはからって や

らないと、うそをついたことになるとおもって、その足あしでひしだやへいきました。

しゅじんの半兵衛はんべえさんには、なにもわけをはなさないで

ただ、お金かねをわたし、いまに十五じゅうご、六ろくの女おんなの子こが目めぐすり

をとりにくるから、わたししてくれと、たのみ、犬いぬをうらへつ

ないでもらって、じぶんはおくのままへ上あがってかくれていました。

やがて、とつぷり日ひがくれますと、あんのごとく、ゆうべ

の むすめが、はずかしそうにして やつてきました。なにも し
らない 半兵衛はんべえさんは、貝かいがらに 入はいった こなぐすりを わた
し、その つかいかたを はなしました。むすめは うれしそう
に、いそいそして かえっていきました。そつと のぞいて 見みて
いた 七右衛門しちえもんじいさんは、

「へえ、よく ばけたもんだなあ。どこから 見みても にんげん
としか 見えないもの。」と、つくづく かんしんしました。それ
から、ながいあいだ 半兵衛はんべえさんと せけんばなしをして、みせ

を 出^でましたが、まてよ、あの きつねどもが、こんばん また
うちを こしらえて、おれを たぶらかすかどうか 見^みてやれと
おもって、やぶみちへ 出^でかけました。

すると、さつきは なかった わらやが ちゃんと あつて、
あかりが もれて、しやみせんと うたが きこえていました。立^た
って きいていますと、

「きょうの 田^たうえどのは、なんで こしを のばいた。

なえ、なえ、と よばれて、なえで こしを のばいた。」

と、いいこえです。

「こんばんは。」と、じいさんは、つりこまれて こえを かけました。

「あら。」と むすめは かけてきて、がらりと とを あけて、

「おじいさま、おくすりを ありがとうございます。さあ、ど

うぞ。」と、むかえ入れいました。見るとみ ははおやは、こなぐすり

を ちやわんの 水みずに といて、目めを あらっています。それが

すむと、うれしそうに おれいを いったあと、

「おじいさん、もう なにもかも おわかりになりましたでしよう。わたしたちは にんげんでは ございません。おやこの きつねで ございます。わたしは、わかいときに さんざん 人を ひとばかした、そのばちでしょうか、目が め だんだんに わるくなつて、いまにも つぶれそうに なりましたので、おなさけぶかいあなたにおすがりして、目ぐすり め を かつていたただこうと おもいまして、ちようど、ゆうべ ここを おとおりがかりになるのを さいわいと、にんげんに ばけて こんなことに なりまし

た。この おくすりさえ ありませば、もう だいじょうぶです。
きつと 目は め なおります。あなたへの おれいの かわりに、
もう これからは、一いっさい 人ひとを ばかしません。どうか、これ
までの ながい あいだの つみを おゆるし下くださいまし。」と
いって、なみだを こぼしました。

じいさんも きつねの こころもちに うたれて、なみだを
うかべました。

「では、すこしばかりだが、お金かねを おいとくから、なおるまで

くすりを かって ようじようしておくれ。ひしだやへは よる
になったら、いつでも 犬を うら口ぐちへ つないでおくように、
はなしておいて 上げるあから。」と 行って、いたわってやりまし
た。ははおやは 気きを かえて、

「さあ、おせん、おもてなしに、うたを おうたいなさい。」とい
いました。むすめは しゃみせんを とって、

「あしの中なかの 小ぶなめこは、すくいようが ござるごの。

そろり、そろり 手てを 入いれて、すくうでござる。」

と、うたいました。

「おじいさま、あなたも なにか うたつてよ。」と むすめが
います。

「おしは、うたは へた 下手でな。それに、せきの さんぼん 三本まつは と
いう うたしか しらんのだよ。」

「じゃあ、その さんぼん 三本まつを おうたいなさいよ。」

ツンツンと むすめは ちょうしを かえました。じいさんは
しわがれごえで うたい出だしました。

それからあと、小こぎつねは、おつかさんのくすりがなくなると、じいさんからもらったお金かねをもつて、ひしだやへ出でかけ出でかけしました。いつものとおりのむすめになったり、十念寺じゅうねんじという町まちのおてらのみょうちんというこぞうさんにばけたり、おしやれでひょうばんの町まちのあぶらやのおかみさんになったりしていきました。くすりやの半兵衛はんべえさんは七右衛門しちえもんじいさんから、くわしいわけをきいた

ので、よるになると 犬いぬを うら口ぐちへ くくりつけておいてやり
ました。

そのうちに きつねの 目めも すっかり なおったと みえて、
それからは、小こぎつねは ぼったり こなくなりましした。七右衛門しちえもん
は、一いちど ようたしの かえりに、また あの やぶみちを と
おりましたが、もう れいの わらやは ありませんでした。

そのご、じいさんが あさはや早く おきて、うらの とを あけ
ますと、とぐちに、たけのこだの、きれいな 草くさの 花はなだの、あ

きになると、くりや まつたけなぞが おいてあることが た
びたび ありました。じいさんは、てつきり あの きつねが お
れいに くれるのだと おもって、こちらも ときどき あぶら
で あげた かしや、がんもどきなぞを、あの 竹たけやぶの 木きの
ねもとへ おいて きてやりました。

もう 町まちや 村むらの 人ひとたちも、やぶみ
ちで ばかされること なぞは なくな
りました。



その竹たけやぶは、いまでは きりひかられて、うちが たちなら
んでいますが、町まちの くすりやは、いまでも みせが つたわっ
て、はんじょうしております。
